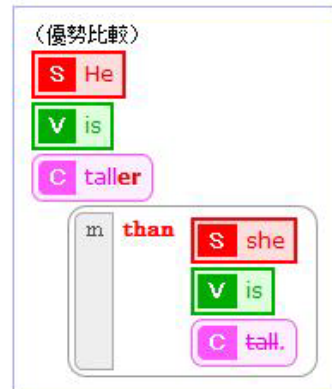
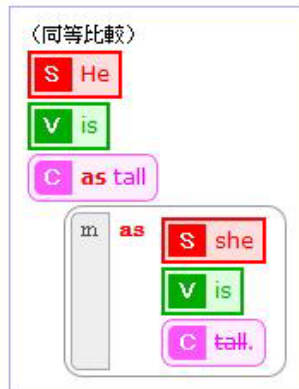
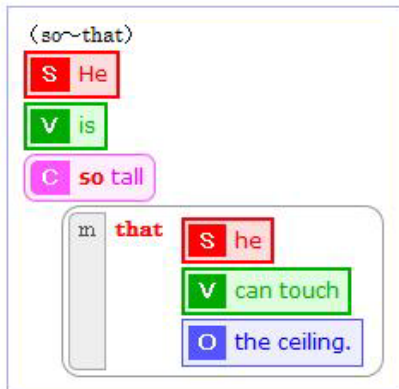


英文構造図

Ⅱ・発展編

- 第 2 版 -



目次

1 発展のための予備知識 1

- 1.1 全体の鳥瞰 1
- 1.2 等位接続詞 2
- 1.3 従位接続詞 3
- 1.4 本章で学ぶ要素たち 5

2 名詞要素 6

- 2.1 平叙文に対応するもの 6
 - 2.1.1 that 節 / 2.1.2 to 不定詞句 (名詞用法) /
 - 2.1.3 動名詞句 / 2.1.4 ネクサス目的語
- 2.2 yes/no 疑問文に対応するもの 24
 - 2.2.1 whether ・ if 節 / 2.2.2 whether + to 不定詞句
- 2.3 wh 疑問文に対応するもの 27
 - 2.3.1 疑問詞節 / 2.3.2 疑問詞 + to 不定詞句
- 2.4 「連立」的關係を含むもの 33
 - 2.4.1 簡単な導入 / 2.4.2 先行詞 + 関係詞節 /
 - 2.4.3 先行詞 + to 不定詞句 (形容詞用法) /
 - 2.4.4 先行詞 + 現在分詞句 / 2.4.5 先行詞 + 過去分詞句 /
 - 2.4.6 自由関係詞節 (名詞節) /
 - 2.4.7 関係副詞節 (名詞節としての)

3 形容詞要素 59

- 3.1 平叙文に対応するもの 59
 - 3.1.1 to 不定詞句 (形容詞用法) /
 - 3.1.2 現在分詞句と過去分詞句

4 副詞要素 60

- 4.1 平叙文に対応するもの 60
 - 4.1.1 接続詞に導かれる節 / 4.1.2 to 不定詞句 (副詞用法) /
 - 4.1.3 分詞句 (分詞構文) / 4.1.4 with + 小節
- 4.2 「連立」的關係を含むもの 69
 - 4.2.1 ~ ever の副詞節

5 他動詞とみなせる句 70

- 5.1 基本的なパターン 70
 - 5.1.1 自動詞 + 前置詞 / 5.1.2 他動詞 + 目的語 + 前置詞 /
 - 5.1.3 be 動詞 + 形容詞 + 前置詞
- 5.2 再分析の意義 72
 - 複数の文型が同じ文型に再分析される場合 /
 - 受動態への変形 / もっと複雑な構造の場合 /
 - 蛇足 / 蛇足 2

6 文型に関する補足 75

- 6.1 SVOXいろいろ 75
 - 「S + V + O + to do」について /
 - 「S + V + O + doing」について / まとめ
- 6.2 know 型と think 型の wh 疑問文 77
- 6.3 動名詞句を目的語にとる形容詞 78

1 発展のための予備知識

ここからは（『基本編』）で学んだ基本5文型を拡大する方法を説明する。これによってより複雑な構造を持った文を無限に作り出すことができるようになるので、徹底的に訓練されたい。

ただし、ときとして機械的な組み立てでは適切な結果が得られない場合（いわゆる「文法的には正しいがそんな言い方はしない」など）もある。そのあたりは、手元の教材の例文を丹念に検討する中で徐々に学んでいただきたい。

1.1 全体の鳥瞰

の「2.5 5文型の一覧」の末尾で「文の要素と品詞との関係」の表を掲げておいた。

本書「 」においては、名詞・形容詞・副詞としてさまざまなものが作られ、使われる。 の場合と最も違うのは、動詞を含む要素が多数登場することである。

これらはかなり多岐にわたるため、全体像が掴めるまでに時間がかかるであろうが、あまり焦らず、一つひとつの項目を丁寧に学んでいただきたい。

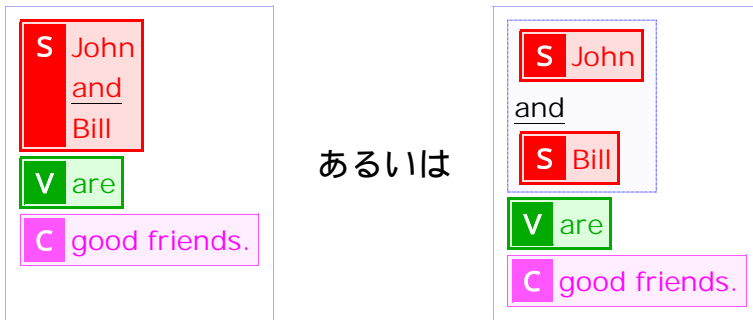
なお、構造図を用いて文構造を理解することは、学習の一段階にすぎない。実際に使えるようになるためには、理解した具体的な例文をしっかりと記憶し、ソラでスラスラと言えるようにすることが大切である。

1.2 等位接続詞

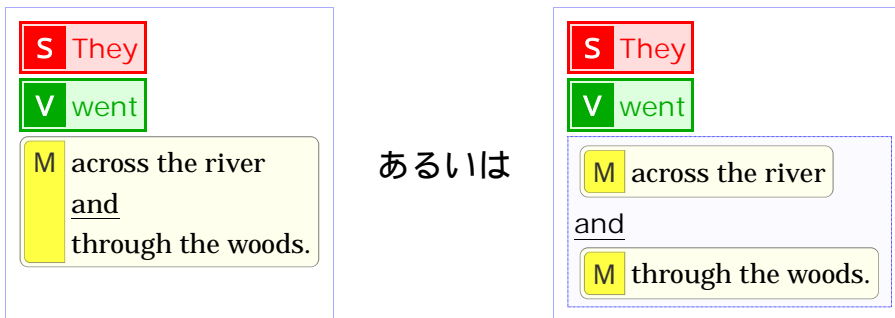
等位接続詞は、複数の要素を書き並べるときに用いる。語句と語句、節と節のように、対等なものを並べる。

簡単なものは1つの枠にまとめ、長いものは別々の枠にした上でそのまとまりを囲む。

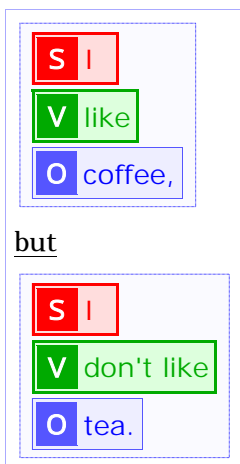
主語と主語



副詞句と副詞句



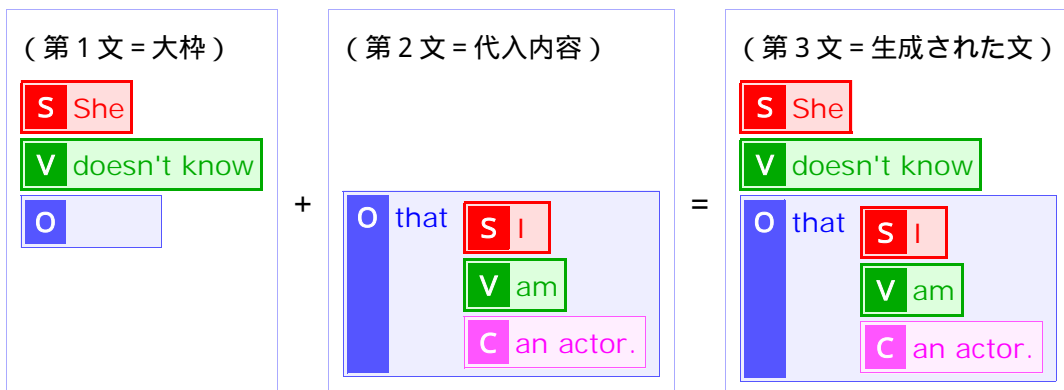
文と文



1.3 従位接続詞

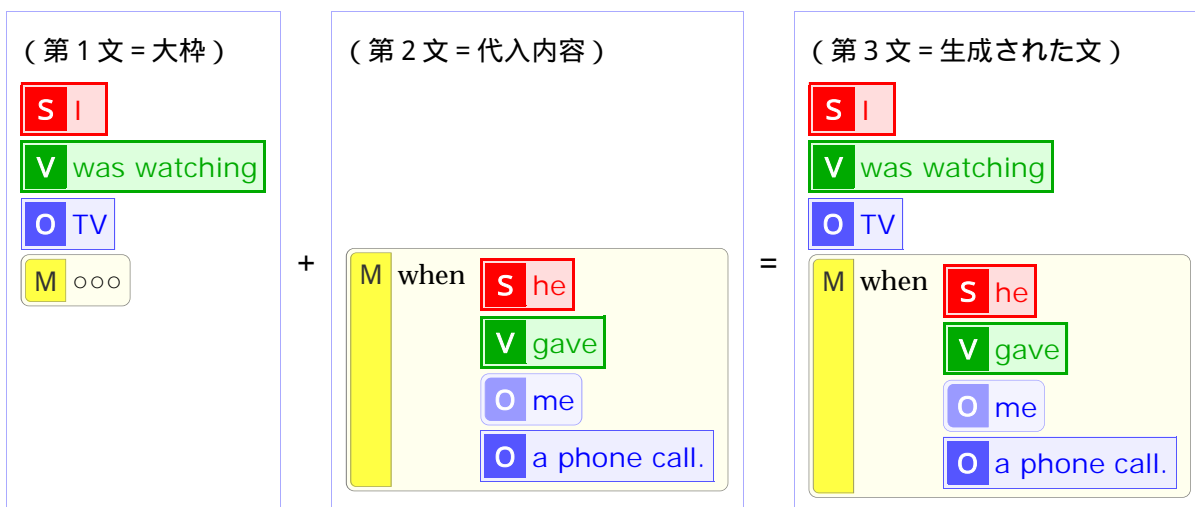
従位接続詞は、文を入れ子（重層構造）にするときに用いる。

名詞節の例



【説明】 第1文の目的語O (○○○) に第2文全体を代入すると第3文となる。接続詞“that”はその部分が名詞要素として入れ子になっていることを示している（ただし省略されることも多い）。

副詞節の例



【説明】 第1文の副詞M (○○○) に第2文全体を代入すると第3文となる。接続詞“when”はその部分が副詞要素として入れ子になっていることを示している。

第3文は「彼が電話をくれたとき、私はテレビを見ていた」の意。

複文の読み方

第3文として表示されているような入れ子構造の文を「複文」と呼ぶ。図の読み方は以下のようにするとよい。

まず、第3文の左端を上から下に向かってタテに見る。これは第1文とほぼ同じ姿をしているのがわかるであろう。

次に、接続詞の右側についても、同様にタテに見る。これは第2文そのものである。

つまり、本書の英文構造図では、同じ階層にある要素はタテに並べ、その内部構造を表すものは右側にずらしてタテに並べてある（以下同様に繰り返す）。このように配置してあるおかげで、複数階層に及ぶ構造が非常に見やすく表示されている。もし、このような配置を使わずに構造を説明しようとしても、なかなかうまくいくものではない。

また、この構造図にはもう一つ大きな特長がある。それは、図中の文字を左上から右下に読めばそのまま原文を再現することができる、ということである（上の2例で実際にお試しいただきたい）。でも述べたように、これら2つの特長を併せ持っていることが本方式の最大の強みであり、それにより英文構造図は4技能すべての実践において活用できるものとなっている。

1.4 本章で学ぶ要素たち

本書では各文型のS・V・O・C・M・mとして働くさまざまな要素（カタマリ）を扱う。種類が多いので、常にこの一覧表に戻りながら学んでいただきたい。なお、最後の「他動詞」以外は全て「文を重層構造にする方法」である。

働 き	大 分 類	形 式	使われる場所	
2 名詞要素	2.1 平叙文に対応するもの	2.1.1 that節（名詞節）	S、O、C	
		2.1.2 (for S +) to不定詞句（名詞用法）		
		2.1.3 (S's +) 動名詞句		
		2.1.4 ネクサス目的語 S + 名詞句 S + 過去分詞句 S + 形容詞句 S + to不定詞句 S + 前置詞句 S + 原形不定詞句 S + 現在分詞句 S + 動名詞句（2種類）	SVOのO	
	2.2 yes/no疑問文に対応するもの	2.2.1 whether・if節	S、O、C	
		2.2.2 whether + to不定詞句		
	2.3 wh疑問文に対応するもの	2.3.1 疑問詞節		
		2.3.2 疑問詞 + to不定詞句		
	2.4 「連立」的關係を含むもの	2.4.2 先行詞 + 関係詞節（形容詞節）		
		2.4.3 先行詞 + to不定詞句（形容詞用法）		
		2.4.4 先行詞 + 現在分詞句		
		2.4.5 先行詞 + 過去分詞句		
		2.4.6 自由関係詞節（名詞節）		
	3 形容詞要素		・ 2.5 前置詞句（形容詞限定用法）	m
・ 4.1 前置詞句（形容詞叙述用法）			SV CのC	
3.1 平叙文に対応するもの		3.1.1 to不定詞句（形容詞叙述用法）	SV CのC	
		3.1.2 現在分詞句	SV CのC	
		3.1.2 過去分詞句		
4 副詞要素		4.1 平叙文に対応するもの	・ 2.5 前置詞句（副詞句）	M、m
			4.1.1 接続詞に導かれる節	
	4.1.2 to不定詞句（副詞用法）			
	4.1.3 分詞句（分詞構文）			
	4.2 「連立」的關係を含むもの	4.1.4 with + 小節	M	
		4.2.1 ~ everの副詞節		
5 他動詞	5.1 基本的なパターン	5.1.1 自動詞 + 前置詞	SVOのV	
		5.1.2 他動詞 + 目的語 + 前置詞		
		5.1.3 be動詞 + 形容詞 + 前置詞		

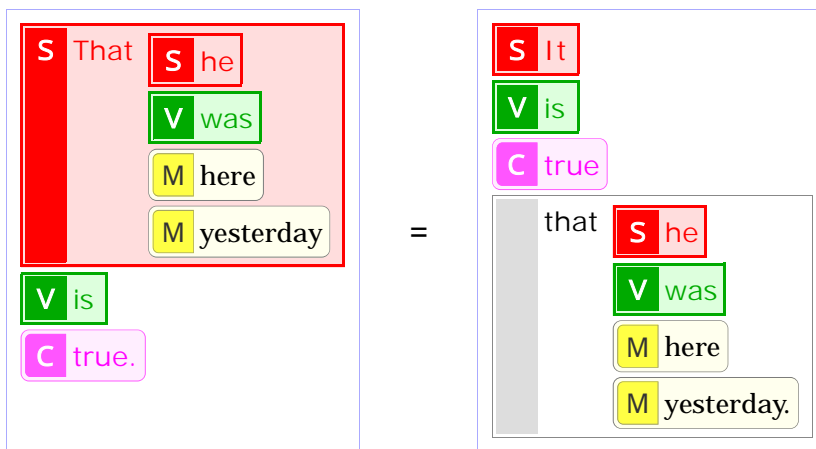
2 名詞要素

2.1 平叙文に対応するもの

2.1.1 that節

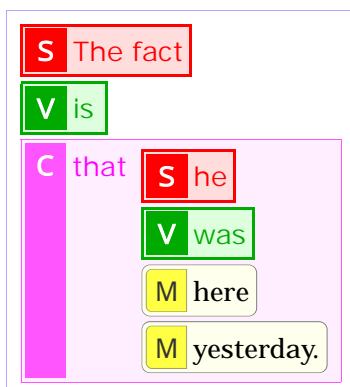
“that” の後に文を置き、「～であるということ」を表す。名詞要素として働くものであり、S・C・Oとして使われる。

Sとして



【説明】 「彼が昨日ここにいたことは事実です」の意。“true”は（日本語訳では名詞のように見えるかも知れないが）形容詞。
単純に代入すると左のようになるが、これでは頭でっかちな文になってしまうので、右のようにすることが多い。冒頭の“it”は「仮主語」、後ろに回されたthat節は「真主語」と呼ばれる。真主語になりうるものとして、that節、to不定詞句、動名詞句（一部）、疑問詞節、whether節などがある（その都度学べばよい）。

SVCのCとして



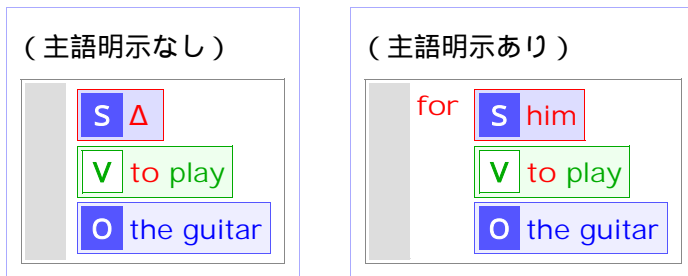
【説明】 「事実とはいうと、彼は昨日ここにいた」の意。

2.1.2 to不定詞句（名詞用法）

S・C・Oとして使われる（“to”が存在する関係で、原則として前置詞のOにはならない）。句そのものの形式としては、主語を明示する場合としない場合とがある。

記法

そこで、構図図においては次のように表記する。

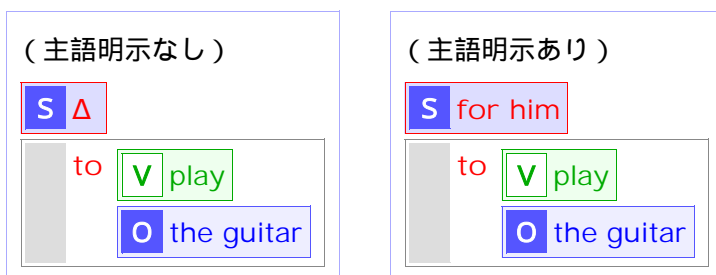


- 【説明】 左は「ギターを弾くこと」、右は「彼がギターを弾くこと」の意。
 左の“Δ”は“play the guitar”の意味上の主語。表示されないがそこに存在していると考えられる場合に、この記号を用いる。
 この部分は、**外見上は主格ではない（表示するときは目的格になっている）のにその役割は主語である**という特殊な性格を持っている。そこでこの種の「S」に対しては特殊な色遣いの枠を使用している。

- 【補足】 不定詞は主語の種類によって形が変わらない部分なので、動詞そのもの（非定形動詞）としてのデザインを使用している。これは分詞・動名詞の他、助動詞を伴う動詞にも使用している（疑問文・否定文など）。

記法についての蛇足

ところで、“to”を左に括り出して



などのように表現する方がより論理的であるとも考えられる。

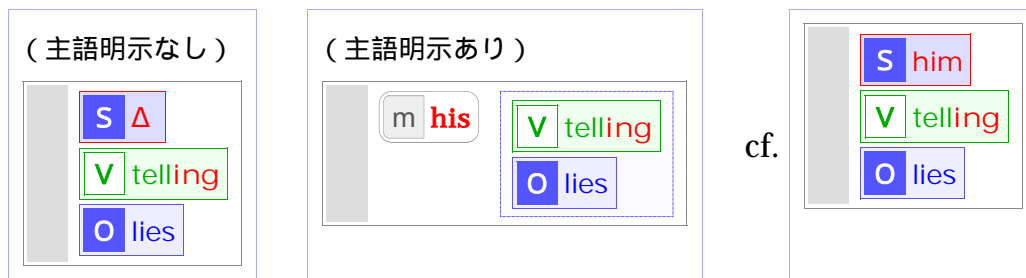
しかし、こういった書き方は動名詞や分詞（“ing”は“to”と違って動詞の後にある）には使えないため、両者の中で表現方法が一貫しないことになる。そこで今回は原則として使っていない。

2.1.3 動名詞句

動詞の語尾に“ing”が付くものとしては他に現在分詞があるが、「動名詞」と呼ばれる場合は必ず名詞として機能し、S・C・Oおよび前置詞のOとして使われる。

記法

句そのものの形式としては、意味上の主語を明示する場合としない場合とがある。



【説明】 左は「ウソをつくこと」、中は（無理やり訳せば）「彼の『ウソをつくこと』」の意。

“△”の意味と枠の色遣いについてはto不定詞の場合と同様である。

なお、右は「彼がウソをつくこと」であるが、このタイプについては2.1.4 で改めて学ぶ。

時制と態について

次のような種類がある。

	能動態	受動態
もとの形	eating	being eaten
完了形	having eaten	having been eaten

蛇足：現在分詞との区別

動名詞と同じ“~ing”という形をしていても、形容詞・副詞として用いられるものは「現在分詞」と呼ばれる。

これらは形が同じであることから「ing形」として一括して扱う文法書もあるが、両者は歴史的には全く別のものであり、形式や性質の大半が共通するようになったのはずっと後のことである。実際、現代の英語においても、動名詞は目的語などを伴わないで純然たる名詞のように振る舞うことがある。

そういった意味からも、両者は区別して扱う方がよいと本書では考えている。

2.1.4 ネクサス目的語

文のかたちになっていないが、節に準ずる性質を持っているもの。いずれもSVOのOとして使われる（ただし“with + 小節”も参照のこと）。句そのものの形式としては次のようなパターンがある。

S + 名詞句	(O = S C かつ C = 名詞要素)
S + 形容詞句	(O = S C かつ C = 形容詞要素)
S + 前置詞句	(O = S C かつ C = 形容詞要素)
S + 現在分詞句	(O = S C かつ C = 形容詞要素としてのV X)
S + 過去分詞句	(O = S C かつ C = 形容詞要素としてのV X)
S + to不定詞句	(O = S V X)
S + 原形不定詞句	(O = S V X)
S + 動名詞句 (その1)	(O = S V X)
(その2)	(O = S C かつ C = 名詞要素としてのV X)

【説明】 「O = S C」とは、主節のOに「S = C」が代入されているということ。
「C = 形容詞要素としてのV X」とは、Cの内部がVで始まる句である（「X」はVに付随するOやCなどのこと）とともに、その句全体としては形容詞要素であるということ。
「O = S V X」とは、主節のOにS V X（つまり文に相当するもの）が代入されているということ。
「C = 名詞要素としてのV X」とは、Cの内部がVで始まる句であるとともに、その句全体としては名詞要素であるということ。
この項は本書の中でも特に分かりにくいかも知れないが、一つひとつの実例の構造を丁寧に確認することを繰り返していけば、次第に攻略できるであろう。

【注意】 における「S C」部分は、主語・述語の関係はあるものの動詞がなく、英語学においては「小節」と呼ばれる。
～ におけるVは、主語によって形が決まらないもの（非定形）なので、「非定形節」と呼ばれる。
ちなみにthat節などの場合は、動詞の形が主語によって決まるもの（定形）であり、「定形節」と呼ばれる。
上記8タイプのうちどれが使えるかは、Vによってさまざまである。詳細は文法書で学ばれたい。

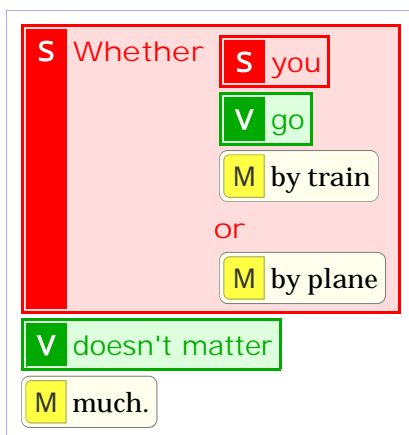
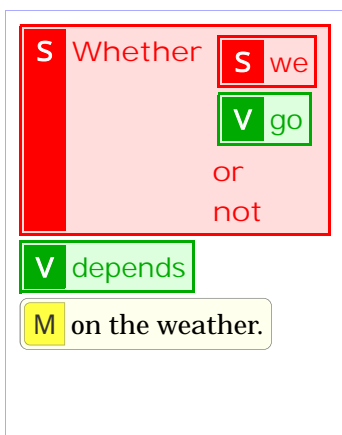
【備考】 の分詞句は形容詞要素なので、性格的には 同じ仲間であると言える。
また、 のto不定詞句を形容詞用法と考えるなら、それも ～ と同じ仲間ということになる。

2.2 yes/no疑問文に対応するもの

2.2.1 whether・if節

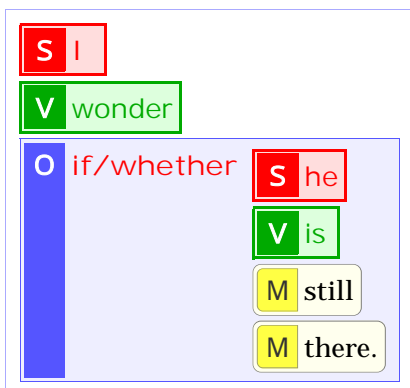
「～かどうか」という意味の名詞節を作る。“whether”と“if”の使い方の違いについては文法書で確認されたい。

Sとして



【説明】それぞれ「私達が行くかどうかは天候次第」「あなたが電車で行くか飛行機で行くかは大して問題ではないの意。

SVOのOとして



【説明】「彼はまだそこにいるだろうか」の意。

2.4 「連立」的關係を含むもの

2.4.1 簡単な導入

数学で

例えば次のような連立方程式があるとする。

$$\begin{aligned} 3x + 5y &= 10 \\ 7x + 2y &= 15 \end{aligned}$$

この方程式を解くには2つの式を合体させなくてはならない。ここで重要なのは、 x は x と、また y は y と、それぞれ同じものだという事である。合体させるための方法はいくつかあるが、例えば y を

$$y = (10 - 3x) / 5$$

のように変形すれば、 y の部分に代入することができる。つまり、代入の準備作業として、 y を「 $y = \dots$ 」のかたち書き直してやるわけである。(代入後の計算は略す。)

日本語で

これと同じようなことが言語の場合にも考えられる。例えば

その男は3つの言葉を流暢に話す。
私は彼に会ったことがある。

という2つの文があったときに、「ある男」 = 「彼」であるとして両者を合体させたいのだとしよう。

そのためには、「彼」に代入できるような説明を x から作り出せばよい。具体的には

彼は 3つの言葉を流暢に話す男 である。

のようにする。それを y の「彼」に代入してやれば

私は 3つの言葉を流暢に話すその男 に会ったことがある。

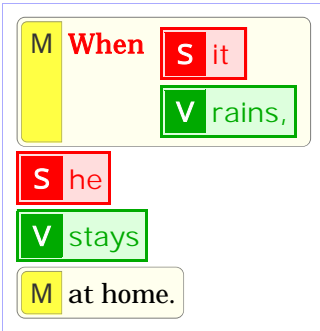
となる。

4 副詞要素

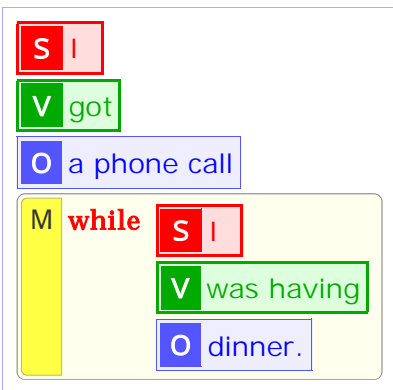
4.1 平叙文に対応するもの

4.1.1 接続詞に導かれる節

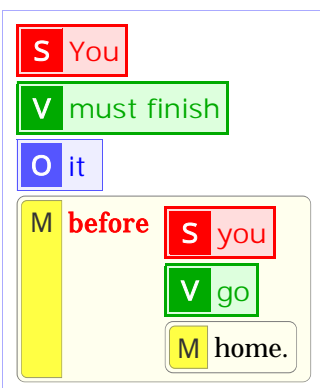
単純に接続詞を付けて副詞節にし、別の文の中で使う。数例を挙げるにとどめる。



【説明】「雨が降るときは彼は家にとどまる」の意。

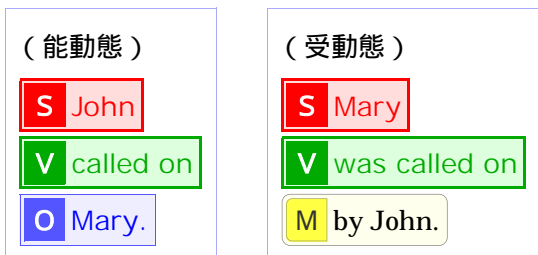


【説明】「夕食をとっている最中に電話がかかってきた」の意。

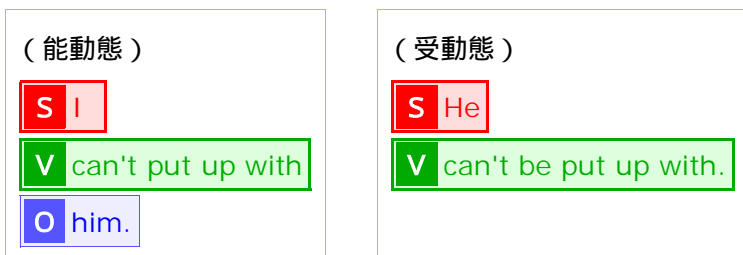


【説明】「あなたは家に帰る前にそれを終わらせなくてはならない」の意。

受動態への変形

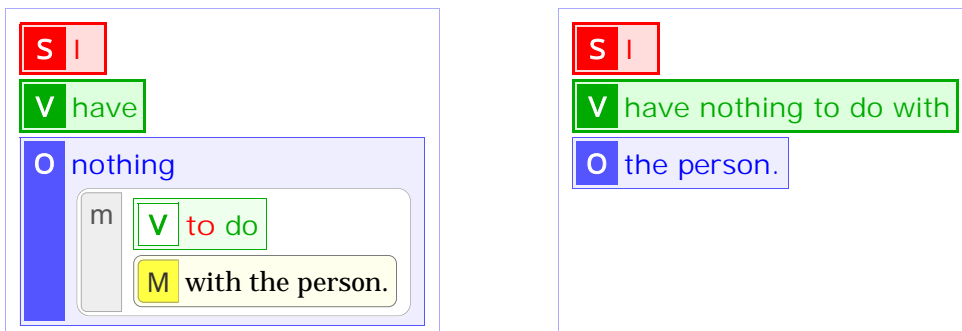


【説明】“call on”は「訪ねる」の意。

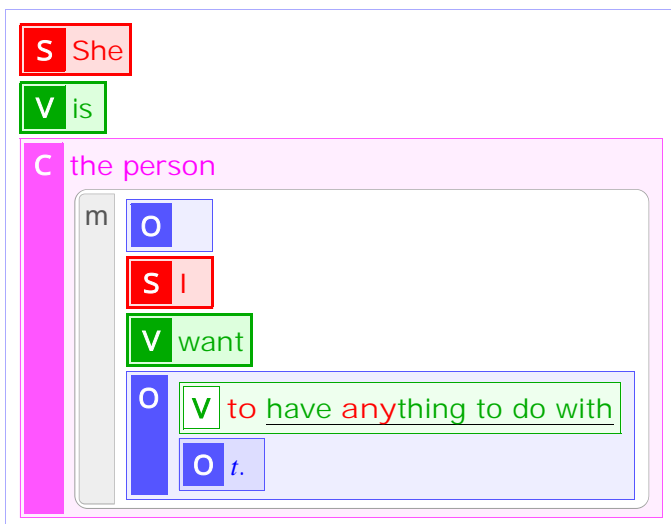


【説明】“put up with”は「我慢する」の意。

もっと複雑な構造の場合



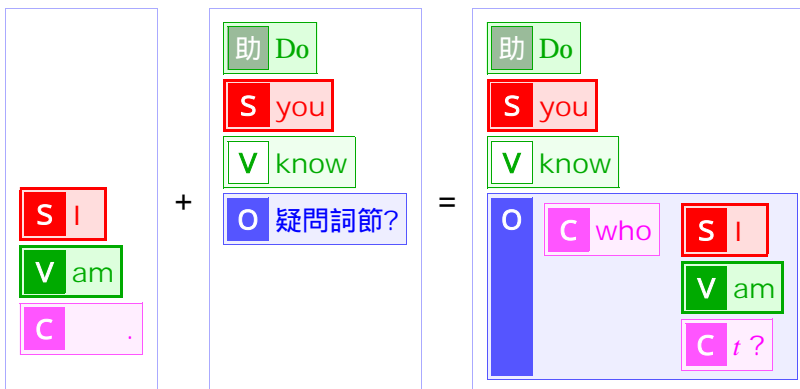
【説明】“have nothing to do with”（～と関係ない）は受動態にはならないが、それでも複雑な文の中で使うときには、上のように捉え直して扱ったほうが便利である。



【説明】「彼女は私が最も関わり合いを持ちたくない人だ」の意味。
 “have something to do with”を一つの他動詞として扱うと、このような応用も簡単にできる。ただし、否定的な内容なので、“anything”とする必要がある。

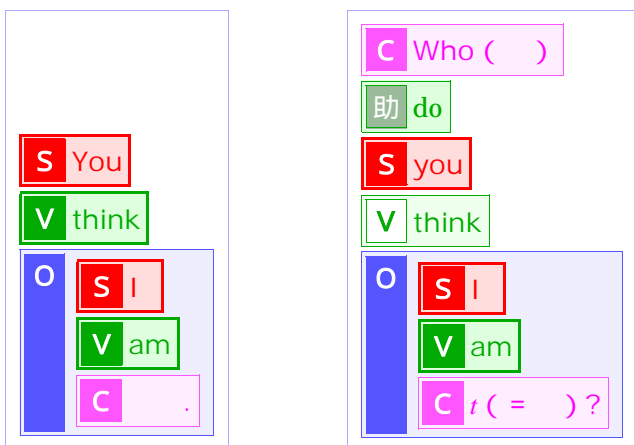
6.2 know型とthink型のwh疑問文

know型というのは、先に「疑問詞節」のところで扱ったもので、



のようなものである。「間接疑問文」であり、疑問詞節が文の内部にある。

think型というのは、



のようなもので、疑問詞が冒頭にある。つまりこれは間接疑問文ではなく、直接的なwh疑問文である。ただ、“who”の出所が従属節のC（文末に痕跡がある）なので、少し分かりにくくなっている。

このように、know型とthink型では疑問詞の置き場所が異なるので、混同しないように注意しなくてはならない。